

岩手県遠野市におけるニホンミツバチ養蜂 —東北地方における一事例として—

宇野 理恵子

筆者がニホンミツバチの養蜂について知ったのは、民俗学を専攻していた一学生の頃であった。卒論のテーマを決めあげていた時、『日本民俗学』に掲載された佐治靖氏の「東日本におけるニホンミツバチの伝統的養蜂」という論文に出会った。佐治論文を読んで東北地方でのニホンミツバチ養蜂の報告例が少ないことを知り、生来の生き物好きも手伝って調査を始めた次第である。

調査地は東北地方とし、ゼミの民俗調査合宿等も利用しながら、岩手県遠野市9名、宮城県黒川郡大和町3名、福島県相馬郡鹿島町、同郡飯館村で9名のニホンミツバチ養蜂を行う人を確認できた。なお、東北地方はニホンミツバチ養蜂に関する資料が少ないため、まず第一にその実態を明らかにすることに努めた。ここでは岩手県遠野市の事例を中心に、養蜂技術、ハチミツの利用法、俗信等について報告してみたいと思う。

地域概況と養蜂活動の概要

岩手県遠野市(図1)は県東南部、北上山脈のほぼ中央に位置する北上山地最大の盆地にその中心がある。盆地周辺には遠野三山と称される北上山脈の主峰早池峰(はやちね)山(1,914m)、六角牛(ろっこう)山(1,294m)、石上(いしがみ)山(1,038m)をはじめ四方を山や高原に囲まれており、林野面積が、ほぼ8割を占める緑豊かな地域である。調査地周辺は山野に囲まれ(図2)、一部針葉樹林地帯が見られるものの、クリ、コナラ、ミズナラといった広葉樹林地帯が広がり、ニホンミツバチの野生群が十分生息可能な環境を整えている。



図1 岩手県市町村地図

気候は厳しく、特に真冬は氷点下10℃を下回る日もまれではない。春の訪れは遅く桜が咲くのはゴールデンウィークの頃になる。夏は2週間ほど盆地特有の蒸し暑さとなるが、盆を過ぎれば涼しくなり、はやくも秋が訪れる。

このように一年の半分を冷涼な気候が占める遠野の養蜂活動は、澤田(1986)の示した養蜂の種類(「ヒト-ハチ関係の諸類型」)で、すべての養蜂活動に共通する3つの要素、巣箱の構造、分蜂群の取扱い、採蜜時の所有群の取扱いを元に養蜂活動を3つに類型化している)にあてはめるとII型(所有群から出た分蜂群を捕ら



図2 遠野市の概況 この地図は遠野市北部を示している。
 図中の番号は表1の養蜂家と対応する

えるのが特徴で、通年蜂群を絶やさない継続的養蜂)にほぼ一致する。ただこれと多少異なるのは、積極的に分蜂群を捕らえようとする人と、自然に巣箱に入るのを待ち、運良く分蜂群を見つけた場合捕らえることにしている人との二通りが存在する点である。後者は分蜂群の扱いに関しては、よりI型(分蜂群が自ら営巣するのを待ち、採蜜期に蜂群を死滅、逃亡させる掠奪的養蜂)に近いといえよう。

一年間の養蜂活動には個人差があるが、ここでは菊池政雄氏(1936年生まれ)を例に見て

みたい(図3)。菊池氏はミツバチを飼いはじめてからほぼ10年になる。毎年3月頃に4本ほど巣箱を作る。自宅の敷地内に所有群を置くが、分蜂期に備え山にも空巣箱を設置し積極的に所有群を増やそうとする。分蜂期には自宅の分蜂群を捕獲する一方、山にも足を運び蜂の入った巣箱は家に持ち帰る。採蜜は11月に行う。菊池氏の活動はあくまで一例であって、他の人々とは多少の違いはあるものの、遠野市の養蜂では5~6月の分蜂期に蜂群を捕獲あるいは自然に入るのを待ち、秋に越冬群を残し他か

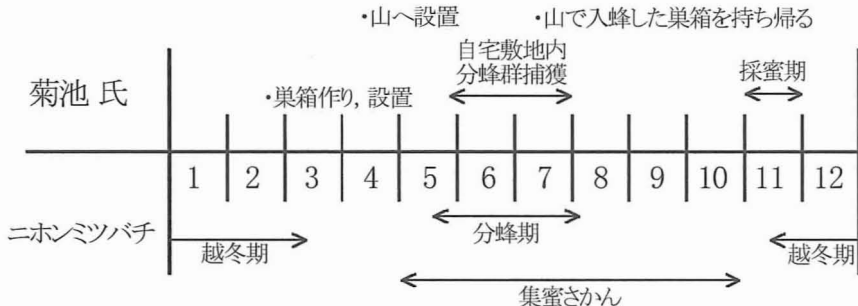


図3 菊池政雄氏の1997年度養蜂活動

表1 遠野市のニホンミツバチ飼養者の状況

No.	所有者	住所	年数	契機	所有群数/ 巣箱数	96-97 越冬数	97年			
							入蜂数	採蜜数/ 所有群数	採蜜期	
採蜜量										
①	M. K.	附馬牛町東禅寺	約8年	祖父より	7/不明	3	4			
②	T. K.	附馬牛町東禅寺			1/1	1				
③	N. K.	附馬牛町東禅寺	5-10年		0/3	0	0			
④	S. T.	附馬牛町東禅寺	1年未満	①より	1/1	0	0			
⑤	T. T.	附馬牛町上附馬牛	10年以上	職場の知人より	5/6	3	2	1/5	9月8日	不明
⑥	A. N.	附馬牛町上附馬牛	約10年	職場の知人より	3/4					
⑦	T. Y.	附馬牛町上附馬牛	約20年	自然営巣を見て真似た	2/3	1	1			
⑧	M. N.	附馬牛町下附馬牛	10-20年	分蜂群より*	4/不明			不明/不明	8月	10升
⑨	H. O.	土淵町栃内	9年	集落内の知人より	13/不明	4	9	0/13		

ら採蜜するという共通性を指摘することができる。

ニホンミツバチを飼った契機と年数

ミツバチを飼っている人々にそのきっかけを問うと様々な答えが返ってくる。その契機と年数を示したのが表1である。これによると、一番多いのが近くに住む親戚、知人から教わる例である。遠野では9名中7名が林業と関わっており、職場の知人を通じての知識のやりとりが行われている。次に、自然営巣の目撃や分蜂群の飛来を捕獲したことが挙げられる。このように身近な人間関係の中での情報交換や野生のミツバチを観察する機会があることは、養蜂を始める契機になっているだけでなく、日常ミツバチを管理する上で各人の養蜂技術を養う重要な要素となってくるのである。

ミツバチの呼称

ニホンミツバチの呼称として最も多いものは「ヤマバチ」である。この他、「ヤマミツバチ」と言ったりもするが、「ヤマ」と付く点は共通している。では、「ヤマバチ」とはどんなハチかと問うと、「山にいる自然の蜂である」という共通した答えが返ってきた。周囲を山林に囲まれた暮らしの中で、人々は分蜂群が山から飛んで来る様子を度々目撃している。しかし逆に、どこから来たかわからない蜂群に対しても「山から」

来たと答える場合が多い。では「ヤマバチ」というのは山に生息する蜂全般を指すのかということではなく、ニホンミツバチただ一種を「ヤマバチ」としているのである。

一方、ニホンミツバチに対しセイヨウミツバチのことを「カイバチ」、「サトバチ」と呼ぶ。この言葉から、「カイ」は「飼い」、「サト」は「ヤマ」に対する「里」を意味するものではないかと推測される。なおこの二種類のミツバチは外見の特徴から明確に区別されており、両種を混同している例はまったく見られなかった。

巣箱の形態と名称

ミツバチを飼うための道具として唯一用いられるのが巣箱である。巣箱の形態には、自然の木を使う場合と、板を張り合わせた直方体のものとの二通りがある。遠野ではほとんどが自然木を利用して作られており(図4)、確認した巣箱40例のうち自然木88%、板製12%の使用率であった。材質はブナ、イタヤ、カラマツ、カバなど様々で、材質についてのこだわりはまったく見られない。実際ほとんどの人が「木は何でもよい」という。作り方はいたってシンプルで、中が腐って空洞になった木(図4右下)や、チェーンソーで内部をくり抜いたものに上下に板を打ち付ける。人によっては雨よけのためトタンやアルミ製の屋根をかける。そして入り口



図4 ニホンミツバチ用の伝統巣箱 下段中央は電信柱に営巣した蜂群からの分蜂を捕獲するために設置されている。下段右は巣箱の材料となる空洞化した丸太。

市附馬牛町東禅寺では「ウト」という一例があととして下部に穴を設ける。穴は「ミツバチの体がこすれない程度」で、しかも「スズメバチが入らないくらいの」大きさが良いとされる。巣箱のサイズはその木本来の大きさにもよるが、高さは約50~70cm、直径が25~35cm程度である。ニホンミツバチは巣箱上部からだいたい7、8枚の巣をかけるが、これはちょうど適した大きさであり、経験からおよそのサイズを推測しているようである。

一方、板を利用した直方体の巣箱（図5）は「自然の木より蜂が入りにくい」とされ、人気がない。またこの理由の他に、遠野では養蜂を行っている人が林業に携わっていることが多く、自然木が手に入りやすいため、自然木の巣箱の方が利用されていると考えられる。

次に、この巣箱の名称であるが、遠野では「ハチネッコ」、「キノネッコ」、「ミツバチネッコ」などと呼ばれる。恩徳春蔵氏によると、大正生まれのお年寄りがよくこのように言うそうである。「ネッコ」という共通する言葉は、巣箱

の形態から付いた名のようなのである。また、遠野った。遠野では木の空洞のことを「ウト」と言い、これがそのまま呼び名になったと考えられる。

所有群の増やし方

II型の養蜂では、翌年まで所有群が残るため、それからの分蜂群を収容することで群数を増やすことができる。そこでまず、巣箱の置き場所を見てゆくことにする。

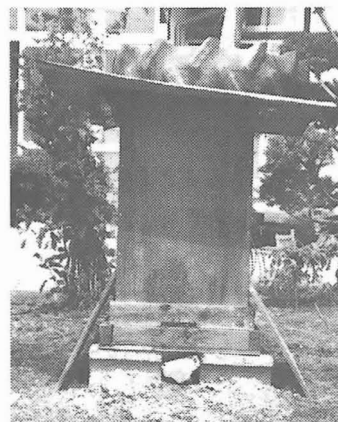


図5 遠野では少ない板製巣箱

巣箱は自宅の敷地内に置かれることがほとんどで、山中に設置されることは少ない。そして一旦置かれると移動はせず、蜂群が入っていてもいなくてもそのまま放置しておく。というのは、空巣箱に、近くの巣箱や近隣の所有群、または山中からの分蜂群が入る可能性があるからであり、現にひとりでミツバチが入ったという話もよく聞いた。そのため人々が設置場所として最適と考える場所は、蜂が入りやすい場所としての認識と重なっている場合もある。その場所と設置条件は、

- ①風の当たらないところ
- ②西風を止めるようなガケのところ
- ③暑すぎないところ
- ④大木のあるところ
- ⑤地面に置くと木が腐るので少し離す
- ⑥入り口は東へ向ける

この中でも①はほとんどの人が挙げており、背後が壁や林になっているところが好まれる。この点では②も似通っている。⑤は皆が心掛けていることのように、どこの家でも巣箱を切り株やブロックにのせたり、木の股の部分にくくり付けたり、二階の軒下に置いたりしていた。また⑥もほとんどの人が口を揃えて言うことである。ある人は、「蜂は飛行場と同じく飛び立ちやすいところを好むのだ」と言う。このように巣箱の設置場所としての意見は一致しており、経験や相互の情報交換から、より最適な場所を導き出しているのである。

さて、分蜂は遠野では5月下旬～7月にかけて起こる。分蜂が起こるのはきまって「晴れた風のない日」で、時間帯は「午前中から昼ごろにかけて」であるとされる。所有群を増やすことのできるこの季節は、巣箱に最も気を配る時でもあり、分蜂前の徴候について人々は次のように考えている。

・分蜂は、家探しの蜂が飛ぶのでそろそろだとわかる。

・黒い蜂が出ると分かれる（分蜂前に発生することから、黒い蜂とは雄蜂と考えられる）。

さて、分蜂が始まって30分ほどするとミツバチは元の巣箱の近くの木などに固まりを作

る。これを放っておくとミツバチは飛び去ってしまうため、すぐに袋を被せて取り、巣箱に入れる。またはミツバチに柄杓で水を掛けたり霧を吹いたりする。9名中3名がこの方法をとる。これは、蜂の翅を濡らして遠くへ飛ばないようにする目的で行われる。こうした方法は、紀伊半島南部の熊野地方で広く行われており、他にも中国山地、高知県、愛媛県、大分県、対馬で同様の手順が見られるという（澤田、1986）。この場合の目的も遠野市の事例と同じである。

分蜂群を収容する際には、「メバチ（女王バチ）が入らなければハチは逃げる」と言われ、女王バチを入れることに注意が払われる。しかし数千匹の働きバチの中に一匹の女王バチを見つけることは、現実には難しいようである。

こうして新しい蜂群の入った巣箱は前述のような場所へ水平になるように置かれる。そのさい入り口は日当たりの良い東へ向けられる。ニホンミツバチは巣箱収容後に逃亡することがよくあるが、その時は「蜂が巣箱を気に入らなかったせいだ」と理解される。

一方、菊池政雄氏（1936年生まれ）は山へも巣箱を仕掛ける。氏はミツバチの入りやすい大木のあるところへ空巣箱を仕掛け、分蜂群が入るまで何度も足を運び、入ったのを確認すると暗いうち（夕方、雨の日など）にガムテープで入り口を塞いで家へ持ち帰る。この時もやはり敷地内の風当たりの少ない場所等へ設置する。

以上、分蜂期の養蜂活動について述べたが、積極的に蜂群を増やそうとする人はこの時期蜂群捕獲のために自身の外出を控えるようにするなど、蜂への傾倒ぶりがうかがえる。また、稲作を営む家では田植えに出ている間に分蜂群が飛んでいってしまうこともしばしばであるという。こうした「ミツバチに逃げられた」経験をほとんどの人が持っている。それでもこの養蜂活動が続いているのは、自然に分蜂群が巣箱に入ることもあるという。ミツバチの習性を、人々が知っているからこそのことだろう。そしてこの「入ったり入らなかったり」というミツバチとの駆け引きに、人々は大きな関心を寄せ

ているのである。

採 蜜

ミツバチを飼う上での楽しみのひとつはハチミツを得ることである。遠野の養蜂では、ハチミツは自給用に採取されており、経済的意味合いはまったくない。また、ミツバチを飼うことそのものが面白く、殺すのがかわいそうなのでハチミツを採らない人もいる。

ハチミツを採るのは山に花がなくなり、幼虫の少なくなる秋が最適とされる。具体的には9月中旬から11月いっぱいである。遠野では、2、3年置いた蜂群から採蜜するが、これは1年目ではハチミツをよくためず、2、3年経った方がハチミツの色と味がより濃厚になるからだといわれる。採蜜の時間帯は、ミツバチが動かない朝方や夕方がよく考える人と、何時でもよいとする人がいる。実際、筆者が見せていただいた時も日中であった。ここで、その一例を再現してみたい。

立花富夫氏（1936年生まれ）と新田朝夫氏（1946年生まれ）は住まいも近く、それぞれ自宅でニホンミツバチを飼っている。9月中旬に伺った時、立花氏宅の裏庭の木にくくりつけてあった巣箱からお二人が採蜜の様子を見せていただいた。服装は、まずカッパを着用し、ゴム手袋、長靴を履き、それから防蜂用ネットの

代用として種籾の袋を被る。この時、なるべく隙間ができないように手袋の上から腕抜きをし、ズボンと長靴の間も布で巻く（図6左）。次に巣箱を木から下ろし、上板をバール等ではがし、巣箱の内側に沿って包丁で切れ目をいれ、巣板を取りだし竹製のザルに入れてゆく（図6右）。本来ならこの後、巣板はザルに入れてハチミツをたらしたり（立花氏）、またはポリ袋に入れ、日光を当てて溶かしザルで漉したり（新田氏）してハチミツを採るところだが、この時は蜜の溜め具合が悪かったため、近々仕掛ける予定でいたクマ用のドラム缶の罌に餌として使われることになった。両氏は猟友会に所属していて、会員であれば市の許可を受け害獣駆除のためクマを罌で捕獲することができる。

採蜜時には、他地域や近代養蜂で採用されている煙でミツバチをおとなしくさせる方法はほとんどとられない。また巣箱内の巣板は、4名の方は半分のみ取り去って蜂群を保持しようと考えているのに対し、5名はすべて取るため、採蜜する巣箱のミツバチは全滅を余儀無くされる。また、服装や道具は身近にあるものを利用し、長崎県対馬や島根県で使用されているミツトリ道具等（宅野1991, 1993）は見出だせなかった。

巣板からハチミツを採るまでの過程は、ほとんどが籠に入れてたらす方法が取られている



図6 丸太巣箱からの採蜜と、採取した巣板をざるに入れたところ

が、恩徳春蔵氏(1934 生まれ)は巣ごと鍋で煮て、溶けた巣がミツロウとなって上部に固まり、下部がハチミツになるとミツロウを取り除くようにする。恩徳氏は、「どこでも煮て溶かしたもんだ」と証言しているので、以前はこの方法が広い範囲で行われていたとも考えられる。

次に、蜜源植物についてたずねてみると、クリの花と答える人が最も多かった。現存植生図でみてもこの地域周辺にクリが多いことから、ミツバチの飛来を目撃しやすいのだろうと思われる。実際クリの開花が始まると、山の中でそのクリーム色の花はひときわ鮮やかで目立っている。二番目に挙げられるのがトチだが、最近では植林や伐採のために減ってきたと聞いた。近代養蜂に限らず、蜜源植物の減少は養蜂活動の存続に関わる問題であると思われる。

外敵とその駆除

ミツバチを飼う上で一番問題となるのは、蜂に大きな損害を与える外敵の存在である。その筆頭はクマで、次いでスズメバチ、ハチノスツヅリガの幼虫スムシが挙げられる。

遠野では、1997年までに4軒がクマの被害に遭っている(図7)。クマは夜に来るが、一度では食べ尽くさずに何回か通ってくる。当地ではクマはそれほど珍しい存在ではなく、山菜採りや茸狩りの季節にはよく話題にされるが、それでもほとんどの人が巣箱を自宅敷地内に置く中で、家の裏までクマが来たという話は穏やかではない。昔はクマといえば奥山にしかいない



図7 クマに壊された巣箱
釘で打ちつけてあった上下板が破られている

存在だったというが、近年言われるように山の食糧不足や、飼料用に栽培されるトウモロコシ(デントコーン)の味を覚えたこともあって、クマが里に下りて来たという話はあとを絶たない。事実クマ被害にあった4軒中3軒はここ数年来の出来事で民家が集中している平地であり、残る1軒は遠野でも最奥部の山中で、以前来たクマは最近は来ないと言う。そうした中で、飼養中のミツバチが襲われる例も増加しているのである。

スズメバチは外敵の中でもミツバチが襲われる頻度が高く、日常的に注意を払う昆虫である。その中でも大型のオオスズメバチ(*Vespa mandanaria*)と小型のキロスズメバチ(*V. similima xanthoptera*)の害が聞かれ、前者はカメバチ、後者はアカバチと呼ばれることが多い。養蜂者はこの時期二種のスズメバチの加害を防ぐためハエタタキや捕虫網で応戦するが、始終現れるスズメバチを防ぎきれないのが実情のようで、何日か油断していたすきに被害にあうケースも少なくない。

スムシはハチノスツヅリガ(*Galleria mellonella*)の幼虫で、巣板に糸を張り、繭を作るためミツバチの逃去の原因になりやすい(図8)。当地では「シカケムシ」、「スカケムシ」と呼ばれる。この害を防ぐためには定期的に巣箱内の巣屑などを取り除く必要があるが、遠野では上下板とも釘で打ち付ける形態が多いため掃除はなされない。しかし近年になって、セイヨウミツバチを飼う人の助言を受け、掃除や採蜜時の



図8 スムシに荒らされ、
ミツバチが逃亡した巣箱

便利さを考慮して底板を打ち付けず、ただ巣箱を板に載せただけの形も少数見受けられるようになった。

この他にも恩徳氏よりテン、トガリネズミの被害も聞いた。

冬越しの管理

秋に採蜜をしなかった群や、採蜜時に巣を半分だけ取った群はそのまま冬を越すことになる。冬でも暖かい日はハチが外に出る時もあるが、11月頃から翌年の3月まで、蓄えた蜜を食糧にして巣箱にこもり、越冬する。遠野の冬は時に氷点下10℃を下回るほど厳しいが、巣箱は特に防寒対策をされることもなく放置したままである。遠野でも特に寒い山間部に住む山下正氏(1930年生れ)は、巣箱は雪を被っても大丈夫だと言う。また、糖分補給について聞いたところ山下氏だけが砂糖水を与えることがわかった。氏によれば、砂糖水が最も良いと言う。その理由は、以前市販のハチミツを与えたらミツバチが死んでしまったとの話を人から聞いたからだそうである。

自然営巣からの採蜜

さて、今まで述べてきた養蜂活動とは別に、山に自然に営巣したものを採取することもしばしば行われている。これは約半数の人が経験している。ニホンミツバチは、中が空洞になった大木によく営巣しており、これを見つけるとチェーンソーで木の側面を切り、巣をすべて採って採蜜する。最近では立花氏が一昨年(1996年)採っており、恩徳氏は自然営巣を見つけていて近々採る予定だと話してくれた。また山下氏の奥さんの山下シガさん(1932年生まれ)によると、私有の山の木でないものや神社の木など切ってはならない場合、巣の入り口穴の周りを四角く切り、内部の巣を全部採った後、もと通りに木片をはめ込んで気付かれないようにしたという。これらはいわばハニーハンティングである。ハニーハンティングはミツバチの家畜化の観点からすれば養蜂の前段階に当たるとされるが(澤田, 1986)、養蜂を行っているが

ら自然界からの採取もあることは注目に値する。しかもこれは決して過去のことではなく、現在のことなのである。

養蜂の産物とその利用

養蜂の産物にはハチミツとミツロウがあるが、ミツロウは遠野では作った人がない。筆者の調査でミツロウについて聞き出せたのは福島県内の二例のみであった。これは、ミツロウが加工を必要とすることと、たとえ作ったとしても利用価値がほとんど無いからだろう。比べてハチミツは様々に利用されていて、共通して挙げられるのが薬としての効用である。喉の痛みや風邪、便秘に効くとされ、ただなめたり、湯で薄めて飲用される。大正8年(1919)生まれの三浦徳蔵氏は、子供の頃、便秘をすると竹製の水鉄砲で薄めたハチミツを流腸されたと言う。また結核の薬としてカタクリの澱粉とハチミツを混ぜたものを服用した。立花氏は農耕馬や牛に薬を飲ませる際、ハチミツを混ぜて与えたそうである。

こうした薬用の他には、食用として餅に付けたりパンに塗ったりという風に使われている。料理の味付けには現在ほとんど利用されないようだが、明治43年(1910)生れの白幡ヨシさんは昔作った多彩な料理方法を話してくれた。白幡さんは現役の語り部(民話の語り手)で、素晴らしい記憶力の持ち主でもある。白幡さんの家では養蜂はやっていなかったが、父親が酒樽を背負って山へ蜂の巣を採りに行った。そうして得たハチミツは部落の中で分け合い、砂糖代わりに使ったり、マメをすった残りかすに混ぜてオコシを作ったり、餅や団子に入れたり、豆腐に混ぜたり等、様々に使われた。やはり薬用としての意味もあって、子供や子馬が便秘になったりすると、ハシに水飴のように取ってなめさせたそうである。当時、ハチミツがかなり貴重品だったことがわかる。また、「分け合う」という点では現在も同じで、ハチミツは親戚に配られたり、欲しがる人にあげることが多い。こうした「ハチミツは売り買いではない」という意識は養蜂を行う人に共通したものであ

る。

さて、ハチミツについても一つ付記しておきたい。それは、「ハチミツによる中毒」とでもいべき事柄である。遠野では、山の自然営巣から得たハチミツは「膝にきて、歩けなくなる」ことがあるという。遠野市土淵(つちぶち)町の人の話では、岩手県下閉伊(しもへい)郡大槌(おおづち)町の山中のハチミツは特に中毒にかかりやすく、地元の人は山のものは採らなかったり、あるいは必ず火にかけて煮溶かすそうである。以下は三浦徳蔵氏の話である。「大正初め頃の話で、金沢村(現、大槌町)の人が山にハチミツを採りに行き、それをなめて中毒になった。痙攣を起こし、気付いた時はもう星空になっていた(夜になるまで何時間も眠ってしまっていたの意).」

また、同じ土淵町の恩徳春蔵氏によると、「下閉伊郡川井村では、山にトリカブトが自生しており、付近の山のハチミツはなめると中毒した。視界が黄色くなり、雪が真黄色に見えるようになる。」とのことであった。宮城県では、山のものに限らずハチミツは少量でも眩暈がして歩けなくなると言われ、これは遠野で「膝にきて歩けなくなる」と表現するのと同じ状態なのではないかと推測できる。しかし、なぜこのようになるのかは不明である。

ハチに関する俗信

ミツバチのみならず、蜂全般に関連して言い伝えられてきた、または信じられてきた事柄がある。聞き出せたのはごく少数ではあるが、蜂と人との結び付きを示す一端としてここに記しておきたい。

①蜂が家の中に巣を作ると縁起が良い。

②蜂が家の中に巣を作ると火災にならない。

③ミツバチが分蜂する年は豊作だ。

④ミツバチの夢をみると良くない。ケンカやもめ事が起こるから。

これらの事柄は一見ハチとは関連がないように思われるが、つながりを問うと、①は理由として、良い事が蜂のごとく増えるから、と言われ、②は蜂も安心するほどだからと説明され

る。③④はミツバチについて言われる事で、天候の良い年は活発に活動するため③のように言われたのだろうし、④はミツバチの生態から連想されたものではないだろうか。

このように、蜂という、身近の自然の中でも小さな位置を占めるに過ぎない昆虫に対して、人々が少なからぬ関心をよせてきたことが分かる。そしてこれは人間が自然界の生物を観察し、その結果を自分たちの日々の営みに引きつけて考えていたことを示す一例ともなっているのである。

むすびにかえて

岩手県遠野市のニホンミツバチ養蜂についてその分布、養蜂活動、産物と利用法、ミツバチに関する俗信について見てきた。ここで整理してみると、遠野の養蜂は、巣箱という唯一の道具を利用して、分蜂期に蜂群を捕獲または自然に入るのを待ち、秋に越冬群を残して採蜜する、というものであった。特筆すべきは「飼う」といってもその行いは極めて自然の状態に近いものであり、しかもそれはただ手をかけないというのではなく、努めて自然にあるようにと心を配っての有り様だということだ。その方がハチの気に入るということを知っているのである。彼らはミツバチを飼う技術や知識を蜂を観察することで得、経験を積んで行く中で養蜂に関して独自の流儀を持つに至っている。養蜂は単にハチミツを得ることを目的とするだけではなく、多分に賭け事としての楽しみの要素が含まれていると考えられる。飼うこと自体が面白いのであって、結果としてのハチミツは副産物に過ぎないのである。

そして遠野の養蜂で面白い点は、ミツバチを飼う一方で自然営巣からの採蜜を行うということである。これは積極的に探して歩くのではなく、山に入った折に偶然発見するなどしたもののだが、こちらはむしろ採ることが大きな楽しみとなっている。この点で「山のハチミツを採る」ことは、いわば春の山菜取りや秋の茸狩りと同じ要素を持っているといえよう。つまりそこには等しく「山の恵みを受ける」といった意味合

いがある。食糧や甘味が今ほど豊かではなかった頃、山菜や茸、山蜜などは「食」の面から見て必要なものであり、また貴重なものだったに違いない。今日ではそれらは必要性よりはむしろ、季節を感じ、野趣に富み、採取の楽しさを味わう点で珍重されている。山のハチミツも見つける機会の少なさから珍しがられ、何よりも採ること自体が大きな「面白さ、楽しみ」となっているのである。

また、調査を行ってみて感じたことは、この地の養蜂が決して特別な例ではないということだ。ニホンミツバチの生息圏の広さから考えれば、山沿いの地域では日常的に養蜂を行っている、あるいは行っていた可能性が十分有り得るだろう。現にこの話を裏付けるように、三浦徳蔵氏は、戦前まで遠野の奥地で養蜂をやらない者はいないぐらい日常見られた活動なのだ、と話してくれた。

近年、副業的でとるに足らないとされてきたこうした活動に光が当てられつつある。その点も踏まえ、民俗学的、科学的な視点を加えながら東北地方の養蜂活動を見守っていきたいと考えている。

(〒028-0515 岩手県遠野市東館町 3-9
遠野市立博物館)

(付記) 本稿は1997年12月に提出した、東北学院大学文学部史学科民俗学専攻卒業論文の一部に修正を加えたものである。

参考文献

- 佐治靖. 1995. 日本民俗学 202 : 32-68.
澤田昌人. 1986. 季刊人類学 17 (2) : 61-125.
菅 豊. 1995. 国立歴史民俗博物館研究報告 61 : 215-272.
宅野幸徳. 1991. 民具研究 96 : 1-16.
宅野幸徳. 1993. 民具研究 103 : 1-13.
宮脇昭. 1987. 日本植生誌・東北. 至文堂.

UNO, RIEKO. Traditional beekeeping of Japanese honeybee in Tōno city, Iwate prefecture. A case study of traditional beekeeping in the Tohoku region. *Honeybee Science* (2000) 21(3): 97-106. Tōno Municipal Museum, 3-9 Higashidate-cho, Tōno, Iwate, 028-0515 Japan.

The purpose of this paper is to report the realities of the traditional beekeeping of Japanese honeybee, *Apis cerana japonica*, in the Tohoku district. The author already made field studies of beekeeping in the Tohoku district in her graduate thesis and found the traditional beekeeping is kept in three places. Tōno city in Iwate prefecture is one of the places. This study is a report of the traditional beekeeping skills, the way of use of honey and popular believes at Tōno city.

Japanese honeybees are called "Yamabachi (= mountain bees)" at Tōno city and are kept in beehives which are handmade. The beehives are made from logs and are set on the premises or in the forests. Beekeeping is begun when wild Japanese honeybees live in beehives or when beekeepers can catch the swarming group of wild Japanese honeybees. In Autumn., beekeepers can get honey from their beehives which were left between two or three years. In the work of getting honey, selected beehives are remained for passing the winter and for keeping next year or a half of honeycombs are used for getting honey. Honey is for private use and is used not for food but for medicine.

Beekeepers learn knowledge and skills of beekeeping by observing the Japanese honeybee's behavior. They develop their own skills through their experience. They enjoy beekeeping by itself and honey is only a by-product for them.

By proper understanding of beekeeping, we can know the mechanisms of exchanging between human beings and nature. The author thinks that folkways of the beekeeping of the Japanese honeybee is important because it is a successful example of using wild creatures.